

Title	ウィリアム・レイニー・ハーパーの聖書解釈と大学観
Sub Title	William Rainey Harper's vision of the biblical interpretation and the university
Author	松尾, 麻理(Matsuo, Mari)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.67 (2009.) ,p.31- 43
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000067-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・レイニー・ハーパーの聖書解釈と大学観

William Rainey Harper's Vision of
The Biblical Interpretation and The University

松 尾 麻 理*

Mari Matsuo

This paper examines William Rainey Harper's intent to make the accomplishments of his biblical research public. Harper sought to do this by using higher forms of criticism that were in turn subjected to harsh criticism in the late nineteenth-century. In spite of the considerable controversy over the methods used during the period, Harper ventured to support and to encourage biblical studies based on a scientific perspective instead of the orthodox interpretation of the Bible. He knew that he would receive a fair amount of criticism by expressing such ideas. The question then becomes what drove Harper to face the challenge?

First of all, Harper was desperate to seek the truth of the Bible and believed that the scientific method, whose main focus was reason, was the best method to use in order to accomplish his purposes. He had no intent to discredit the orthodoxies. Secondly, his strong belief indicated that colleges and universities were supposed to accept freedom of opinion. Harper wanted the University of Chicago in particular to be an institution that was based on freedom of opinion and to guarantee this freedom in the field of theology. Lastly, his ultimate goal was to pervade democratic ideas throughout the campus, and he believed that freedom of speech was essential to the university as the sound basis of democracy.

This study takes particular note of the connection between Harper's public statement regarding theological studies and his position as the president of the University of Chicago. Harper set a goal worth working toward at the University of Chicago, and he believed that the scientific approach to the Bible would beneficially assist the university in reaching that goal.

1. はじめに

19世紀後半のアメリカは、資本主義によって産業が発展し、都市部の人口が爆発的に増加した。1870年から1900年の間でシカゴの人口は5倍以上になり、新世紀を越す頃には100万人を超え、その4

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（教育思想史）

分の3を移民が占めるようになっていた¹⁾。こうした人口の増加、産業の発展は、高等教育の発展にも影響を与えることになる。1880年の時点で、アメリカには364校のカレッジと大学があったとされるが²⁾、その後150近いカレッジと大学が1880年から1900年の間に新たに開学している。大学の数が増えるに従い、その機能は変化し、カリキュラムが拡大した。大学はもはや若者を聖職者へと訓練するための存在ではなくなったのである。修辞学、数学、ラテン語、ギリシア語といった古典カリキュラムからはなれて、現実的で実践的な学問が重宝され、1861年には、科学と工学に焦点を当てたマサチューセッツ工科大学が創設されている。産業資本主義のもとで巨万の富を得た実業家たちが、大学設立のために寄付を行ったのはちょうどこの19世紀後半のことであり、産業の発展は多くの大学が設立される一因となっている³⁾。

この産業発展期は、金ぴか時代と称され、内容はともかく見た目だけが豪勢になり、すべてを金銭的な豊かさではかる俗物主義が横行した。その精神を正当化したのは、経済的な発展を自主独立の精神で支えた個人主義であり、ダーウィンの進化論を下敷きにした優勝劣敗の成功主義であった。アメリカが都市化していく中で、恵まれた者は莫大な成功を収め、そうでない者は貧窮して都市のスラムを形成し、両者は明暗を分けるようになった⁴⁾。このようにして、産業発展、貧困、価値観の多様化に見られる社会変化が急速に起こり、大学に多種多様な期待が寄せられるようになった。そうした中、大学において一般に伝統的価値と一体である宗教をどのように扱うかが問題になっていた。ハーバード大学の学長チャールズ・エリオット(Charles Eliot)は、神学教育を無宗派で科学的なものにしたいと望んでおり、カリキュラムも自由を重んじ選択性を導入することを試みている。エリオットの宗教思想や神学教育に対する考え方は、神学校の教授や牧師から批判を受けた一方で、コーネル大学の学長アンドリュー・ホワイト(Andrew White)に支持され、科学抜きにキリスト教を解釈することに異を唱えている⁵⁾。

こうしたキリスト教に関する科学的研究と研究大学の使命とを結びつける機会をもっていたのが、本稿で取り上げるシカゴ大学(The University of Chicago)の初代学長であるウィリアム・レイニー・ハーパー⁶⁾(William Rainey Harper, 1856-1906)である。彼は、弱冠36歳で学長職に就き、シカゴ大学の中に、当時考えるあらゆる高等教育活動を取り込むことを試みて大学設立に奔走した。一般に、その企画力と実行力を携えた経営手腕が着目され、評価されることが多いが、ハーパーは、元来は旧約聖書の研究者である。時流を考慮すれば、シカゴ大学における宗教の在り方をいかに位置付け、大学が対峙していくのかについて思索していたことは間違いない。むしろ、ハーパーとシカゴ大学との関係は、キリスト教を抜きにして語ることはできない。バプテストユニオン神学校がシカゴ大学の前身校であり、創設者となるジョン・D・ロックフェラーは、バプテストカレッジに資金を付与することを明言していた。ハーパーが学長に選出された欠かせない理由の一つに、彼が信仰あるバプテスト信者であったことを述べておく必要がある⁷⁾。ハーパーはキリスト者として設立当初からキリスト教を根底としたシカゴ大学を構想することを期待されていた。ハーパー自身、当時の教会や神学校の在り方には不満を抱いており、大学がキリスト教の理解にいかなる貢献ができるかを常に考えていた。その享受対象を大学内の学生にとどめることなく、キリスト教に興味関心を示す一般大衆までを視野に入れ、その実践のためにシカゴ大学において積極的に行動に出ている。その中でも本稿では、主に大学と宗教の在り方に関して言及を行う。

ハーパーは、シカゴ大学において聖書研究に批判的聖書解釈を用いるという態度を明確にし、聖書のより良い理解に努めようとした。しかし一方で、19世紀後半のアメリカにおいて、この研究方法を用

いることは、オーソドックス派の聖書解釈と真っ向から対立することを意味しており、多くの教会関係者及び世間一般から批判にさらされる状況にあった。しかし、ハーパーは、科学的手法で聖書研究を行うことによって、聖書をより良く理解することができ、真実に近づくことができると信じて、批判を承知の上で、自ら論を公表していたのである。そこには、自分を含め、人々の聖書理解を深め、信仰をさらに強めたいという思いがあった。加えて、聖書研究であっても、自分の意見を自由に公表する言論の自由が、大学において保障されなければならないとの考えをハーパーは抱いていた。それは、ハーパーがシカゴ大学を通して最終的に目指していたのが、民主主義思想の浸透であり、その基礎要素となる言論の自由を自らが学長を務める大学において保障することは、ハーパーにとって極めて重要なことだったからである。

以上のことを示すにあたり、19世紀末におけるハーパーの聖書学研究の立場に着目し、旧約聖書学者であるハーパーが自らの研究を通して学長を務める大学への貢献をどのようにとらえていたのかを本稿では検討する。より具体的には、ハーパーの創世記を中心とした旧約聖書研究を参照し、その批判的研究における彼の姿勢と目的を究明することから、学長ハーパーの目指したシカゴ大学像の一端を明らかにすることを試みたい。

2. 先行研究検討

ハーパーの生涯と業績については、これまでアメリカ高等教育史の中で数多く言及されてきた。その中でも、ハーパーの宗教的側面を対象として考察を加えた論として、ジョージ・マーズデン(George Marsden)は、シカゴ大学を低教会派(low-church)のプロテスタントであるとして、その特徴とハーパーのリベラルだと評された聖書批判に対する姿勢との類似点を指摘している⁸⁾。またローレンス・ヴィッシー(Laurence Veysey)は、シカゴ大学があまりにも多くのことを大学に取り込もうとした結果、うまく組織化できなかつたと論じている。加えて、宗教や研究を大学に取り込もうとした割には、確固とした一貫した信念に欠けていたことを指摘する。例えば、ハーパーの聖書批判的研究において、神への絶対信仰との境界線が曖昧であったり、バプテスト大学であるのに、バプテストに大きなこだわりがなかったりすることなどを挙げている。ヴィッシーは、シカゴ大学はこのために存在するという意識に欠けていると指摘した⁹⁾。確かに、両義に解釈されかねないような信仰についての発言がハーパーにはみられるが、本稿では、そのキリスト教信仰は一貫したものであるとの立場をとる。ヴィッシーが認識していなかったハーパーのキリスト教観とそれに伴う彼の大学観とをあわせて確認する必要がある。

さらに、マリア・フリーマン(Maria Freeman)は、ハーパーについて、主に教師としての一面を論じている¹⁰⁾。フリーマンは、研究を霊的にだけではなく人間の目を通して行われなければならない¹¹⁾と論じたハーパーの研究姿勢について明らかにしている。聖書が神によってだけではなく人間の手も加えて読み解かれるべきというハーパーの言説が、従来の聖書研究の在り方に抵触して議論を巻き起こしたという指摘は正しいといえる。しかしながら、ハーパーの聖書研究に対する姿勢は読み解くことができるものの、具体的にハーパーの研究の何がオーソドックス派との対立を招くことになったのかについて、当論文では詳細に論じられていないため、理論の根拠を得難い点は否定できない。またそこでは、教師としての一面が主に取り上げられており、聖書の批判的研究をすることで、大学を運営する学長としてのハーパーが何を目指そうとしたのかを当論文では読み取ることができない。

ジェフリー・ストラブ(Jeffery Straab)は、ハーパーが、モーゼのモーゼ五書の著作、ダビデの詩

篇110章の著作を否定したり¹²⁾、他に旧約聖書の著作を否定した論文を擁護したりしたことにふれ、ハーパーのリベラルであるとされた面に言及している¹³⁾。確かにハーパーがオーソドックスな聖書研究を単に引き継いでいないことは事実であるが、ハーパーは自分自身の出版する雑誌を保守的だととらえていたことから分かるように、オーソドックス派へ挑戦状を叩きつけたわけではない。ハーパーは次のような持論を展開している¹⁴⁾。例えば二人のキリスト者がいるとする。両者に同じ信仰の困難が発生した。そこで、一方はある方法で、もう一方は別の方法で問題を解決したが、それぞれ異なる結果が出た。しかし、両者とも満足している。ある特定の点でお互いが間違っていると思うかもしれないが、両者の信仰は同じなのである。つまり、キリスト者は多くの異なる方法で問題を解決する。その違いはあれども、信仰は変わらないままである、と。この姿勢に見られるように、むしろ、議論を巻き起こすようなことは回避したいと思っていたのである。だが、当論文の主要点はハーパーのリベラルな行動を明白にすることであり、ハーパーが、オーソドックス派につくことなく批判的研究を推奨し続けたというストラープの観察に基づいている。しかし、ハーパーのリベラルであると評されたその行動の基盤となる思想面についての言及は十分になされていない。

そこで、シカゴ大学が設立された19世紀末におけるプロテスタントの聖書研究に対する見解を概観しつつ、ハーパーの論文から、彼の研究の立場を明らかにするとともに、その含意について考察を行いたい¹⁵⁾。その上で、結果的に研究者に限らず、マスコミ、教会に至るまで、リベラルであると評され議論を引き起こすことになった数々の研究論文を公表したハーパーの意図はどこにあったのか、シカゴ大学学長としてのハーパーの大学観を確認することを試みたい。

3. シカゴ学派における聖書研究の姿勢

シカゴ大学は開学当初から北部バプテスト派のリベラルな高等教育機関として知られていた。ストラープと同様、ウィリアム・ブラックニー(William Brackney)はシカゴ学派(Chicago School)を最も影響力のあるアカデミックなバプテスト学派であると評価している¹⁶⁾。後にシカゴ大学の神学部の教授になるジョージ・ノースロップ(George Northrup)は、歴史的な教義に意義を見出さなくなっており、カルバン派や複雑な教義を否定し、不合理で(unreasonable)専制的な独裁者のみがアタナシウス教義における救済に同意するのだと論じた¹⁷⁾。このような教義解釈は、当時バプテスト及び歴史家には認められていないことであった¹⁸⁾。19世紀末のバプテスト派の多くがリベラルな思想に与していたわけではない。バプテストは教義を支持しており、その教義を受け入れなければメンバーシップの権利を拒否されることもあった。そして、聖書を絶対的に正しいものと認め、聖書の言葉そのものが神の言葉であると宣言していた¹⁹⁾。しかし、ノースロップは当時敬意を表されていたアウグスティヌスやカルバンら神学者も否定したのである。そして、米国バプテスト教会が、受け入れていたカルバン派教義から離れた論説を次々と発表した。このことは、ラディカルな聖書批判に対してノースロップが寛容な姿勢をとっていたと受け取れる部分である²⁰⁾。ノースロップの考え方は、シカゴにおける歴史的、批判的な方法を受け入れるということを神学部の教授陣に示したことになった。ハーパーが学長を務めていた頃からシカゴ大学は、バプテスト団体だけではなく全米のプロテスタント学派の間でも因習打破主義的であった。まったく新しい批判的アプローチはシカゴから提出され、他大学で認識されていたようなカルバン派の伝統やオーソドックス派にコミットする必要性は消え失せ、シカゴでの神学的学問は、真実のための自由な学問探究と同意義とされた²¹⁾。そして、20世紀初頭には、科学的研究法を聖書研究に用いること

で、真実に近づくことができるという考えがシカゴ大学においては浸透していたことがうかがえる²²⁾。

その真の立役者はハーパーであったと指摘されており²³⁾、実際ハーパーが伝統的聖書解釈はもはや時代にそぐわないと感じていたことは確かである。ただ、オーソドックス派をいたづらに刺激して真っ向から対立しようとする意図はなかったことは上述のとおりである。実際、キリスト教に対するハーパーの信仰は、保守派と根底では重なるところが多い。しかしまた、キリスト教の真実を研究によって追究しようとする姿勢は明白であり、この流れは、シカゴ大学でハーパーが中心となって編集していた *The Biblical World* において彼の死後も受け継がれていることが分かる。本誌の目的は、聖書研究の向上と改善のために貢献することであると公言されており²⁴⁾、このことは、ハーパーの聖書研究に対する見解がシカゴ大学内において受け入れられていたととらえられる一端であろう。ハーパーの性格は「真実はあなたを自由にする」という信念に一貫してあらわれていたというように²⁵⁾、彼は真実という概念に価値をおいていたといえる。それが以下にみていくように、ハーパーの研究にもあらわれているといえることができる。

4. ハーパーの創世記研究方法

19世紀後半、保守派とリベラル派とを隔てた重要な議論に、旧約聖書中の書物が神によってモーゼを通して文字どおり与えられたのかどうか、霊的に動かされた人間が聖なる物語を描き編集したのかどうかということがある。聖書の絶対的権威と絶対真実をいかに解釈するのかにもつながる重要な問いである。ハーパーは、旧約聖書の歴史的起源についての科学的な分析をはっきりと提唱していた。しかし、聖書は神の力に靈感を受けているという思想を頑強に擁護していた。そして、科学的研究によって究極的には、聖書の真の霊的価値をより多くの人が理解し、受け入れることになることを確信していた。ハーパーは学生もまた自分で結論を導き出していくような研究方法に慣れる必要があると考え、また議論のある課題を通して自分自身で考える機会を学生に与えていた²⁶⁾。

本章では、実際にハーパーのどのような聖書解釈が、世間一般的にハーパーをリベラルなキリスト者であると位置づけることになったのか、その具体例を創世記の初章におけるハーパーの解釈から読み解くこととしたい。創世記におけるハーパーの聖書伝統派との違いがはっきりと公言されたのは“The Pentateuchal Question. I. Gen. 1:1-12:5”においてである²⁷⁾。モーゼが一人で著したと伝えられている創世記は複数によって書かれたものであり、かつ、それを一つにまとめた編纂者が存在するという批判的研究に賛同する自らの研究論文を提示したのである。その最初の3章、天地創造について述べた箇所を概観することでハーパーの研究視点に着目したい。

創世記を書いたのはモーゼではなく祭司であると思われるPと預言者と思われるJの二人である。複数によって書かれているということの第一の理由に言葉(language)があげられる。例えば、PとJによってどのような語彙や語句が何度繰り返し用いられたか、同じ内容でもPとJによって表現語句が異なることなどを、とりわけモーゼ五書を中心に分析してハーパーは指摘している。節によって異なる内容や状況であることが考慮されたとしても、語彙の使い方に大きな差がみられ、またこの差は、多くの文体の違いとも一致していることから一人で書いたものとは考えにくいという²⁸⁾。

第二の理由は、文体(style)である。文体にPとJという複数の表現の違いが認められる。ハーパーが論じるPの特徴についてごく一部を以下にみておく。①書き方がシステムチックである。例えば、章の出だしに同じフレーズが用いられている。②年代順である。それは、創造されたものの書き方の順序な

どに認められる。③緻密で科学的である。植物や動物の分類のされ方に表れたり、物事が描写される度に繰り返した全て述べられたりしている。④確固たる表現が用いられている。詩的描写的要素が欠落しており比喩などが見られない。⑤言葉数が多く繰り返しが多い。植物や動物の種が事細かに分類されたり、不必要に言葉が繰り返されたりしている。ハーパーは、そうした言葉が削除されたら一体何が残るのかと言い、あまりの繰り返しの多さに実にうんざりするとすら述べている。⑥個人ではなく団体として表記する。例えばJのman, womanに対してmale, femaleで記述する²⁹⁾。

一方、Jの特徴を以下に概観する。①文体が自由である。人物の書き方に対して順序がなく、主要な人物が描かれた後に彼を中心としてその他の人物が描かれている。②たくさん話と伝統が描かれている。エデン追放やカインとアベルの話などの語りに見られる。③表現が美しく詩的である。簡潔に事を先に述べて、複雑なことは後にまわす³⁰⁾。④擬人的表現が多い。神に対して歩く(walking)、呼吸する(breathing)、植える(planting)などの表現を用いる。⑤預言的及び教訓的である。⑥総称よりも固有である。上記のPとの対比例に加えて、特定の庭や河を創ったり、Jの描写では明白で確実な結果が表されたりする³¹⁾。

ハーパーは、言葉と文体に続けて同様に、3つ目には題材(material)を、4つ目には神学(theology)の観点から、PとJによって著されたと考えられる章や節には違いが認められるとして、PとJの存在理由を論立てている。以上ごく一部を取り上げただけでも分かるように、ハーパーの創世記研究は、一節一節をおった上で、4つの観点から特徴を見出し人間的視点から理由をつけて従来の聖書批判を行うものである。この手法は、キリストがモーゼ五書を書いたと言っている、キリストが言ったことは全て正しいに違いない、ゆえにモーゼ五書を書いたのは、モーゼであると信じるオーソドックス派とは異なる見解を導く。一節ずつ細部にわたり考察した上で、創世記のモーゼの著作を否定したわけだが、このハーパーの考えや研究方法は、当時問題なく受け入れられたわけではなかった。

5. ハーパーの批判的聖書研究に対する批判

ハーパーの研究方法に従えば、聖書は単なる歴史上の記録として解釈される可能性もある。ハーパーの研究は、とにかく事実を探究することを忠実に、それから結論を提示するという方法に従っていた。こうした態度からハーパーをラディカル思想の先導者であると当時の保守層は見られるようになったのである³²⁾。また、プリンストン神学校の教授であったW・グリーン(W Green)は、創世記の中には連続して筋の通った話がある。それは全て真実でまぎれもない歴史であり、人々によってそう評価されている。その歴史を信じない正当な理由は見当たらないと論じている³³⁾。続けて、一貫していかつ信頼できる歴史をとりあげ、それを矛盾した別個の文書へと変えてしまうような批判的なプロセスに明白な誤りがある。言葉づかい、文体、考え方に根拠をおいた文学的分析は、それがどんなに書物の構成に注意をおいていたとしても、信頼できる書物の真実を損なうことはできない³⁴⁾としてハーパーの言語学的な聖書分析から結果を導き出そうとする研究方法を批判している。そして創世記の著者はモーゼ一人だと主張するのである。グリーンにしてみれば、いくら細部にわたり研究がなされていようとも受け入れられる論ではなかった。

また、ミネアポリスの第一バプテスト教会の保守派牧師であったウィリアム・ライリー(William Riley)は、モーゼが著者でないということが真実であるとするれば、人類の歴史に影響を及ぼすことであるとして批判している³⁵⁾。これは、新約聖書において、創世記はモーゼによって著されたと解釈できる

発言がイエス・キリストによってなされているため、創世記のモーゼ著作を否定することは、すなわちイエスの言葉の否定にもつながり、何世紀にもわたって信じられたことが覆されかねないためだと推察される。

グリーンやライリーに認められるように、保守派にとって聖書は絶対的な存在であり、内容に疑いを持ったり、神位を脅かしかねないような研究解釈を行ったりすることは、19世紀において一般に、神への冒瀆であり、信仰を惑わせるととらえられていたといえる。グリーンはPとJという複数の人物によって書かれていることから生じる連続性のなさなどについての指摘を否定した。そこから、ハーパーの批判が誤りであることを、ハーパーの解釈と照らし合わせて提示している。また、「キリストがモーゼ五書はモーゼによって書かれたと述べている。ゆえにモーゼがモーゼ五書の著者であり、我々がそうでないと否定するならば、神の言葉の真実性を否定し、神の神位を否定するということだ」というオハイオ州のレン神学校の教授の言葉に代表されるように³⁶⁾、イエスの言葉に疑問を呈すること自体が批判の対象になったといえる。1891年にはモーゼ五書著作批判を批判した論文が、「重要論文の概略」(“Synopsis of Important Article”)として他雑誌に取り上げられているほどであり³⁷⁾、19世紀末の時点で、保守派の意見が弱くなかったことがうかがえる。

その後、全米においてバプテストのリベラル派の台頭は、次第に大きな存在になってくる。大学や神学校の教授たちが、リベラルな思想を提唱したり、擁護したりするようになってきたのである。また、非宗派的な大学や神学校で教育を受けたバプテスト派の学生の多くは、そうした学校のリベラルな思想に気をとめ、多かれ少なかれ、その精神を受け入れるようになってきたり、様々な出版物が、バプテスト派の保守主義に対抗する見解を流行として広がっていった。しかし、結局のところ、バプテスト信者が購読している週刊誌の半分すら、聖書とその教えに関してリベラルな見解をとっている編集者側には傾いてはおらず、バプテスト新聞が極度にリベラルな見解を唱えても、それを支持してくれるほど大きな支援者を抱えてはいなかった。アメリカの大部分のバプテスト信者は、リベラルな思考の影響のもとにあっても、保守的であり、彼らが支持する新聞には保守主義を要求している³⁸⁾。つまり、時代が進むにつれ、伝統的聖書解釈に替わって、科学的研究を用いた聖書研究が後々至る所で聞かれるようになって、バプテスト派の大部分は、聖書解釈に対して保守的な態度をとり続けていたのである。

6. 批判的聖書解釈とシカゴ大学

グリーンやライリーとは異なり、ハーパーが伝統的な聖書解釈を踏襲していないことは明白である。しかし一方で、ハーパーは神に対する信仰を随所で表明しており、また彼の信仰はシカゴ大学とともに尽力したトーマス・グッドスピード(Thomas Goodspeed)によっても認められている³⁹⁾。しかも、ハーパーはオーソドックス派と論争するようなことを全く好んでいなかったという⁴⁰⁾。それが事実であれば、神位を認めながらも、同時に批判的研究を展開していたことになる。19世紀後半から20世紀初頭において、リベラルとされた聖書解釈は正統派とは見なされず、抵抗なく一般に受け入れられることはなかった。世間一般から学者層から強い批判を受けてまでハーパーはなぜ自らの論を発表していたのか、その理由を考察することとしたい。

まずは、真実を明らかにしたいというハーパーの信念に因っている。真実を発見するためには何が最も良い手段であり方法なのかを検討した結果が、旧約聖書研究ではhigher criticismと評される科学的研究だったのである。そして、この方法を用いてなされた研究を高く評価している⁴¹⁾。科学の出現以前

は、神について部分的にしか知られていなかった。しかし、そのはたらきによって、神についての知識がより確実に、より明白になると論じている⁴²⁾。また、ハーパーは、キリスト教の特質の一つに合理的であることをあげている。さもなくば、科学者や哲学者にも拒否されるであろうとして、宗教は徹底的な研究にたえるはずであると論じている⁴³⁾。つまり、科学的研究を用いて真実を導き出そうとすることはハーパーにとって理にかなったことだったのである。聖書を盲目的に信じるよりも、聖書を知り、より良く理解することがキリスト教の継続には大切であると考え、そのためにはまだ発見されていない真実を知る必要があるとハーパーは信じていた。その研究のために、合理的な研究方法を用い、結論を導くにも理由を重んじたのである。真実追究に価値をおく考え方は1895年のハスケルオリエンタルミュージアム(Haskell Oriental Museum)の定礎式におけるハーパーの次の言葉からもうかがい知ることができる。「この建物が一人の寛大なクリスチャンの女性によって、世界の神聖な聖書、特にキリスト教について広く深く研究することができるようにと贈られたと考えると、さらに意味があり、感動的である。しかし、最も意義があり、最も感動的なことは、科学と真実を目標とするための素晴らしい寄贈を行ったその深いキリスト教の信仰と寛大な心である⁴⁴⁾。」真実を発見することが、ハーパーにとって研究の存在理由であったと読み取ることができよう。

まず真実を理解したいという気持ちが真実を導くとして、講義においても事実から結論へ至るのに学生が理由を示して考える(reason)のを手助けするような質問をすることの重要性を論じ⁴⁵⁾、ただ単に教えられたことを信じるのではなく自ら発見しようとする姿勢の必要性をハーパーは説いた。具体的には、①自らに疑問、質問を問いかけ答えを探究する、②証拠を用いて結論を導き出す、③徹底的に研究をすることをハーパーは重要視した⁴⁶⁾。そして、真の答えを見つける目的で質問をして、答えが見つかったならば、限られたことを信じていた時よりも、より全体的な真実へたどりつくという⁴⁷⁾。ハーパーは、信仰と批判は対立するものではなく、むしろ切り離すことができないものと見なしていた。19世紀後半に全ての生活面で認められるような急速な変化の中で、聖書の徹底した知識のみがキリスト者の信仰を固め、キリスト教を強化すると述べている⁴⁸⁾。聖書の批判研究は、キリスト者の信仰を深めると認め⁴⁹⁾、聖書の神位性は無視されるものではなく、聖書研究は霊的にそして科学的になされる必要があると説いたのである⁵⁰⁾。

こうした自ら考え真実を追究しようとする姿勢は、「学習者にとって分析を伴わないようであればその学習は役に立たない。単に実情調査であったり、目的がなかったり、反復したりするだけではハーパーの大学では研究として認められなかった⁵¹⁾」という指摘にも見られるように、聖書学研究に対してのみハーパーが貫いていたことではない。シカゴ大学は、神学、法学、医学のプロフェッショナルスクールを持っていたが、それらは単に聖職者、弁護士、医者養成するためだけではなく、各分野での発見と発見の養成という目的のために存在しており⁵²⁾、ハーパーはシカゴ大学を真実追究のできる場にしようとしていたということが分かる。そして、その真実追究のための最高手段として理由を伴う研究方法をハーパーは用いていたのである。

また、ハーパーは事実と分析を用いた考察だけではなく分析に対する熱情も提示してきた。この二つは切り離すことができないのであり、万事は分析者の視点からとらえられると考えていた⁵³⁾。そして、提示されたポイントの一つずつとらえ、それらが真実かどうかを自分自身で決めることは、このような問題を研究する者にとっての義務であると述べている⁵⁴⁾。実際に、学長職という立場にありながら、批判的かつ科学的手法を用いて、熱心に研究を行い、学生の指導にまであたったのは、真実を探究するこ

とに加えて、また別の目的があったためと考えられる。

ハーパーは自分の論を発表することで、言論の自由を表現していたのである。既に概観してきたように、19世紀末は聖書の批判的研究自体がタブー視されていた一面がある。しかし、そうした伝統的慣習や規則に屈することなく論を述べるができる自由をハーパーは重んじ、学長に就任してからもシカゴ大学において表現の自由を実践しようとしたのである。ハーパーは、批判的聖書研究によって、オーソドックス派との対立の可能性を理解していたが、決して対立を招こうとしたのではなく、むしろ自身の研究の発表にはたいへん気をつけていた⁵⁵⁾。ハーパーは聖書を深く信仰しており、その神位性を疑ってはいなかったのである。従来 of 伝統的教義観を挑発する意図はなく、かえって注意深く対立を避けるような表現方法で理論を立てたため、表現の曖昧さやまわりくどいことで批判さえ受けている⁵⁶⁾。だが同時に、科学的研究を評価しており、真実のための学問探究が常に望むような結果をもたらすとは考えておらず、神の権威と表現・研究の自由の2つにコミットしていた。それが結果的にシカゴにおいてハーパーに苦痛を与えることにもなったのである⁵⁷⁾。それでも、思想・言論の自由の精神を自らの研究をもって示そうとしたのは、それがシカゴ大学の研究のあるべき姿につながるととらえていたからである。神学部は他の学部と同様の学問の自由をもつべきであり、神学部の教授が恐れることなく研究したり、制限なしに教えたりする権利を擁護していたのである⁵⁸⁾。この精神は、自身の旧約聖書研究活動にとどまらず、シカゴ大学の活動の随所に表れている。研究のためのより大きな機会と全学部で研究結果を報告する出版物をもつシカゴ大学を設立したことに始まり、一部例を挙げれば、聖書やセム語研究促進のためのジャーナルの発行、ヘブライ語の通信教育コース、日曜学校やバイブルクラブの授業のための出版物などを通して自由の精神を奨励していたことにもつながっている⁵⁹⁾。ハーパーにおける真実追究の姿勢は、神学教授のための言論の自由を擁護することでもあり、ひいてはシカゴ大学全体の学問の自由を保障することにあつたのである。

最後に、大学における自由に価値をおいたハーパーの信念について考察することとしたい。真実を探究すること及びそれを行う自由は大学において認められなければならないとハーパーは信じていた。その根拠は、大学が民主主義を実行する場であるからに他ならない。ハーパーは民主主義を「人類達成の最高の理想」とし⁶⁰⁾、自治、教会統制からの自由とともに表現の自由が真の大学の特徴的な印であると論じている。そして、この3つの印をもって大学は民主主義の精神をもつ機関であると公言する権利があるとした⁶¹⁾。宗教の問題についても自由な発言ができるというのは、民主主義の精神に基づいて宗教に対する思想と言論の自由が与えられているということの意味する。これは、ハーパーの考える大学の定義にも関連した概念だといえる。大学とは何かという問いに対してハーパーは次のように定義づけている。1) 研究目的のための自治団体 2) 民衆を導くため国によって認められた学校 3) 文明社会の発展の中で提示された文明の問題を解決するために民衆によって認められた機関。そして、こうした機関においては、人生や思想の問題について、また真実を発見するという目的について取り組むことが奨励される。その発見が、他に真実だと信じられていることに対して不利にはたらいたとしても、である。そして、このためには公的及び教会を含めたあらゆる干渉からの絶対的な自由を必要とするとハーパーは信じていたのである⁶²⁾。シカゴ大学は、それが実現される大学でなければならないというのがハーパーの大学に対する理念であったといえる。だからこそ、真実の探究と学問、とりわけ神学の自由に対して強い信念をもって取り組んでいたのである。

さらに、大学は民主主義を普及させる役割を担っているとハーパーはとらえていた。「大学は民主主

義のメシアである」「大学は民主主義の預言者つまりスポークスマンである」という言葉⁶³⁾の中にハーパーが大学の使命を民主主義との関わりの中にみていたことは明確であり、ハーパーにとって「真の大学とは民主主義に忠実である⁶⁴⁾」ことを意味した。これを実現させるためにも、ハーパーは、シカゴ大学を通して民主主義の精神を広める役割が学長である自分にもあると考え、真実探求の姿勢を貫き、また研究の自由を保障する必要があるとみていたといえるだろう。

7. おわりに

ハーパーが批判的聖書研究を行ったのには、まず研究者として純粋に真実を明らかにしたいという思いがあったためであろう。しかし、ハーパーほど世間に名を知られるようになると、時には必要以上にマスコミにたたかれ誤解を招くこともあったようである⁶⁵⁾。それでも、批判的聖書研究を自ら続け、推奨した一つの理由として、やはりシカゴ大学内における学問、とりわけ宗教にかかわる研究の自由を、学長である自らの身をもって示したかったためだといえる。また、自由であるとは神との接触があることで、真実とはそれ自体が神の性質をあらわしたものであるとハーパーは論じており⁶⁶⁾、神との関係の中に自由と真実に価値をおくハーパーの思想基盤の一端を読み取ることができる。研究の自由を通して、ひいては大学そのものが民主主義であることをハーパーは目指していた。また、ハーパーの一連の行動は、神によって彼に課せられた使命によるとハーパー自身が感じていた。ハーパーの使命感については、シカゴ大学内外からも同種の評価がよせられている。「ハーパーが彼の時代の正しい用途のため神に対して負う責務を常に感じていたが、感情よりはむしろ理由と分別が支配していたということは明白である。さらには、そのような任務の重大さに感謝しており、彼自身を神のエージェントとして感じていたことは明瞭である。これらは全て、彼の行動、発言によって大胆なレリーフの中に引き出されたのである⁶⁷⁾」という学外の教授からの評価がある。また同様に、ハーパーは、聖書研究を深め、広めるため、という神からの使命を認識していた。この使命に誠実に尽くすことがハーパーの人生の願望であり、情熱であったとシカゴ大学内からの評価にも表れているように⁶⁸⁾、ハーパーの行動は、神に後押しされているという信仰も相まっつての結果だとも推察される。ハーパーの批判的聖書研究は、単に真実を発見しようとするための研究方法であるにとどまらず、自由の象徴でもあり、シカゴ大学が民主主義な大学であるための要因であった。そして究極的には、シカゴ大学が、高等教育機関における民主主義の礎となるためであったと論ずることができよう。

注

- 1) Paul S. Boyer, Clifford E. Clark, Jr., Joseph F. Kett, Neal Salisbury, Harvard Sitkoff, and Nancy Woloch, *The Enduring Vision: A History of the American People*, Lexington, Massachusetts: D.C. Heath and Company, 1996, p. 603
Robert A. Divine, T. H. Breen, George M. Fredrickson, R. Hal Williams, and Randy Roberts, *America Past and Present*, New York: Addison-Wesley Educational Publishers, 1997, p. 342.
- 2) 潮木守一『大学と社会』教育学大全集6, 第一法規出版, 1982年, 6頁。
- 3) Frederick Rudolph, *The American College and University*, Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 1962, p. 112.
- 4) 森本あんり『アメリカ・キリスト教史: 理念によって建てられた国の軌跡』新教出版社, 2006年, 124-125頁。
- 5) D. G. Hart, *The University Gets Religion*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999, pp. 48-51.
- 6) シカゴ大学学長に就任するまでのハーパーの略歴は以下の通りである。1856年, オハイオ州ニューコンコル

ド生まれ。1870年、ムスキングムカレッジ(Muskingum College)にてB. A.取得。家業に従事した後、1873年、イエール大学に進学。2年後にPh. D.取得。1875年、ニューコンコルドに戻り、結婚。同年、テネシー州メイコンにあるメイソニックカレッジ(Masonic College)のプリンシパル(principal)に就任、ラテン語と数学を教える。一年後、オハイオ州グランヴィルにあるデニソン大学(Denison University)にて古代言語のチューターとして、2年半勤務。1876年、長老派からバプテスト派へ改宗。1879年、イリノイ州モーガンパークにあるバプテストユニオン神学校にてヘブライ語の講師になる。1881年、サマースクールを開始。その後、ニューヨーク、シャトーカでヘブライ語プログラムを立ち上げ。1882年、雑誌*Hebrew Student*を創刊。1886年、イエール大学にてセム語を教授。1890年、シカゴ大学の理事会にて初代学長に選出され、翌年受諾。

- 7) John R. Thelin, *A History of American Higher Education*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2004, p. 120.
- 8) George M. Marsden, *The Soul of the American University*, New York: Oxford University Press, 1994 pp. 236–250.
- 9) Laurence Veysey, *The Emergence of the American University*, Chicago: The University of Chicago Press, 1965, pp. 360–380.
- 10) Maria Freeman, “Study with an Open Mind and Heart: William Rainey Harper’s Inductive Method of Teaching of The Bible,” Ph. D. diss., The University of Chicago, 2005.
- 11) William Rainey Harper, “Foreshadowings of the Christ in the Old Testament,” *The Biblical World*, Vol. 6, No. 6, The University of Chicago Press, 1895, p. 401.
- 12) Jeffrey Paul Straab, “The Making of a Battle Royal: The Rise of Religious Liberalism in Northern Baptist Life, 1870–1920,” Ph. D. diss., The Southern Baptist Theological Seminary, 2004, pp. 214–215.
- 13) Ibid. pp. 209–210.
- 14) William Rainey Harper, “Our Intellectual Difficulties,” *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, 1904, p. 104.
- 15) 本稿提出間際の掲載により今回取り上げていないが、ハーパーと大学と宗教をめぐる次の研究が2008年11月に発表されている。Michael Lee, “Higher Criticism and Higher Education at the University of Chicago: William Rainey Harper’s Vision of Religion in the Research University,” *History of Education Quarterly*, Vol. 48, No. 4, The History of Education Society, 2008, pp. 508–533.
- 16) William H. Brackney, *A Genetic History of Baptist Thought*, Macon, Georgia: Mercer University Press, 2004, p. 344.
- 17) Ibid., pp. 347–348.
- 18) Albert H. Newman, “Changes of the Theology of Baptists,” *The American Journal of Theology*, Vol. 10, No. 4, The University of Chicago Press, 1906, p. 596.
- 19) John Horsh, *Modern Religious Liberalism*, New York: Garland Publishing, Inc., 1988, pp. 209–211.
- 20) Newman, op.cit., p. 596.
- 21) Brackney, op.cit., p. 350.
- 22) “A Quarter-Century of Old Testament Study,” *The Biblical World*, Vol. 28, No. 6, The University of Chicago Press, 1906, pp. 355–359.
- 23) Brackney, op.cit., p. 348.
- 24) “A Forward Look,” *The Biblical World*, Vol. 28, No. 1, The University of Chicago Press, 1906, pp. 3–4.
- 25) Albion W. Small, “As University President,” *The Biblical World*, Vol. 27, No. 3, Memorials of William Rainey Harper, The University of Chicago Press, 1906, p. 219.
- 26) John W. Boyer, “*Broad and Christian in the Fullest Sense*” *William Rainey Harper and the University of Chicago*, Chicago: The University of Chicago Press, 2005, p.27.
- 27) William Rainey Harper, “The Pentateuchal Question, I. Gen. 1:1-12:5,” *Hebraica*, Vol. 5, No. 1, The University of Chicago Press, 1888, pp. 18–73.
- 28) Ibid., pp. 21–24.
- 29) Ibid., pp. 25–26.

- 30) Ibid., pp. 26–27. 次のような表現例が挙げられている。Not “in the beginning,” but before there was any plant of the field, or any herb, or any rain, or any man, was the time when Yahweh made earth and heaven. The scene was an arid waste, dry earth, because Yahweh had not yet caused rain to fall; there was no vegetation, because as yet there was no man to till the ground. But a mist arises and moistens the ground: clay is taken and molded into the form of a man; breath is into his nostrils; a garden is planted, tree made to grow in it, rivers made to flow in it, while the man tends and tills it.
- 31) Ibid., p. 27. 例えば “therefore the name of that place was called”
- 32) Boyer, op.cit., p. 30.
- 33) W. Henry Green, “The Pentateuchal Question,” *Hebraica*, Vol. 5, No. 2/3, The University of Chicago Press, 1889, p. 138.
- 34) Ibid., p. 138.
- 35) William B. Riley, *The Finality of the Higher Criticism, or, The Theory of Evolution and False Theology*, New York: Garland Publishing, Inc., 1988, pp. 9–14. (originally published in 1909).
- 36) Henry P. Smith, “Christ and the Pentateuch,” *The Old and New Testament Student*, Vol. 10, No. 6, The University of Chicago Press, 1890, p. 327.
- 37) Matthew Leitch, “The Pentateuch: Objections to Modern Theories,” *The Treasury*, 1891, pp. 551–557, pp. 611–617. この梗概が *The Old and New Testament Student*, Vol. 12, No. 4, The University of Chicago Press, 1891, pp. 238–239. にて取り上げられている。本文箇所は p. 238.
- 38) Newman, op.cit., pp. 593–608.
- 39) Thomas Wakefield Goodspeed, *William Rainey Harper: First President of the University of Chicago*, Chicago: The University of Chicago Press, 1928, p. 139.
- 40) Ibid., p. 139.
- 41) William Rainey Harper, “Old Testament Prophecy,” *The Biblical World*, Vol. 25, No. 1, The University of Chicago Press, 1905, pp. 43–45.
- 42) William Rainey Harper, “Loyalty to Self,” *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, 1904, p. 72.
- 43) William Rainey Harper, “Religion and the Higher Life,” *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, 1904, p. 17.
- 44) William Rainey Harper, “The Laying of the Stone of the Haskell Oriental Museum,” *The Biblical World*, Vol. 8, No. 2, The University of Chicago Press, 1896, p. 85.
- 45) Freeman, op.cit., pp. 2, 37–38, 46.
- 46) Ibid., pp. 12–14, 43.
- 47) William Rainey Harper, “Religious Belief in College,” *Religion and the Higher Life*, Chicago: The University of Chicago Press, 1904, p. 135.
- 48) Freeman, op.cit., p. 3.
- 49) Ibid., pp. 17–18, 25, 40, 113–114, 116, 127.
- 50) Ibid., pp. 21, 118, 120.
- 51) Milton Mayer, *Young Man in a Hurry: The Story of William Rainey Harper, First President of the University of Chicago*, Chicago: The University of Chicago Alumni Association, 1957, p. 54.
- 52) Ibid., p. 23.
- 53) Harper, “Pentateuchal,” op.cit., p. 72.
- 54) Ibid., p. 73.
- 55) Freeman, op.cit., pp. 30, 33–34, 43.
- 56) Boyer, op.cit., p. 27.
- 57) Robert W. Funk, “The Watershed of the American Biblical Tradition: The Chicago School, First Phase, 1892–1920,” *Journal of Biblical Literature*, Vol. 95, No. 1, The Society of Biblical Literature, 1976, p. 11.
- 58) “William Rainey Harper,” *The American Journal of Theology*, Vol. 10, No. 2, The University of Chicago Press,

1906, p. 202.

- 59) Albert, op.cit., p. 602.
- 60) William Rainey Harper, "The University and Democracy," *The Trend in Higher Education*, Chicago: The University of Chicago Press, 1905, p. 1.
- 61) Ibid., p. 4.
- 62) Ibid., p. 5.
- 63) Ibid., p. 14.
- 64) Ibid., p. 20.
- 65) Goodspeed, op.cit., p. 139.
- 66) William Rainey Harper, "Bible Study and Religious Life," *The Trend in Higher Education*, Chicago: The University of Chicago Press, 1905, p. 154.
- 67) Charles Rufus Brown, "His Religious Life," *The Biblical World*, Vol. 27, No. 3, Memorials of William Rainey Harper, The University of Chicago Press, 1906, p. 224.
- 68) A. K. Parker, "The Chicago Period," *The Biblical World*, Vol. 27, No. 3, Memorials of William Rainey Harper, The University of Chicago Press, 1906, p. 184.